

黄金の郷

こしえるびと

つむぐストーリー vol.131

高い志のもと、日々“キラリ”と光る活動をしている人たちがいる。
“黄金の郷”いわて平泉を支える、魅力溢れる“こしえるびと”の
メッセージをシリーズで紹介していく。

農業で楽しく生きていく

大東町鳥海 田渕 健晴さん

ワーキングホリデーから農業へ

日に日に落ち葉のじゅうたんが広がっていく晩秋の山あい。1棟の牛舎の中で、田渕健晴さんは牛一頭一頭に声を掛けながら餌を与えていく。

農業との出会いは、今から12年前。職を探すためにワーキングホリデー制度を利用してオーストラリアに滞在していたが、なかなか就きたい仕事が見つからなかった。オーストラリアでは、政府が指定する業種に一定期間従事すればビザの有効期限を延長できる。そこで健晴さんはリンゴ農園で働き始め、同僚だった妻の有季さんと出会い、結婚。出産に伴い帰国を決め、先に大東町へ移住していた祖母を追いかけるように同町へ移住した。移住先で牛を育てていたこともあり、夫婦で和牛繁殖とリンゴ栽培を始めた。

どんなことも楽しさに変えて

健晴さんは和牛繁殖を、有季さんはリンゴを主に担当。大東町で農業を始めて以来、夫婦で品目を分業している。お互いがパンクしないよう、最適な経営規模を見極めながら管理、栽培に励んでいる。

就農してから今日までを、健晴さんは「いかに楽しく仕事するかを考えて過ごしてきた」と振り返る。当初は3頭しかいなかった牛は、今では13頭まで増えた。先輩農家から「頭数を増やしていくと、土地や機械の使い方を変えていかなければならなくなる」とアドバイスされた通り、実際に検討が必要な状況にも直面した。今もなお、思い通りの経営実現には至らずに悩まされているが、「悩みはそれだけで楽しくやれている」と笑い飛ばす。

ゆっくり楽しく過ごしたい

「楽しくやるのが一番」がモットーの健晴さんは、どんな作業でも楽しさや面白さを見いだす。そのためにも、先輩農家や市場関係者にはどんどん質問する。「血統構成と餌の管理で、自分の理想の牛を作り上げるのが和牛繁殖の醍醐味」という教えは、日々の作業を興味深いものにしてくれる。

その一方、「足るを知る」の心も大切にしている健晴さん。「家族とゆっくり楽しく生活できればそれでいい」と欲張らず、規模拡大も考えていない。「今ある牛とリンゴでできることを考えて暮らしていきたい」と願う。

スローライフというイメージとは裏腹に、忙しい時期が多いのが農業の実態。それでも田渕家には、今日も穏やかな時間が流れている。



PROFILE

田淵 健晴さん (37)

Takeharu Tabuchi

大東町鳥海

1988年宮城県名取市生まれ。ワーキングホリデーでオーストラリアに滞在中、リンゴ農園で働き農業の楽しさを知る。帰国とともに大東町へ移住、2019年就農。繁殖牛13頭、リンゴ2.5㍓。妻、子3人と5人暮らし。

